

まんぶくちやうじやたからのくらいり
『萬福長者寶藏入』

——影印と翻刻・解題——（下）

白 戸 満喜子

下冊

十一丁オ

（壽老）
じゅうろう神人

「いやもし、大こくさん。きんねんのようにせかいがよくなつてほうねんも又めづらしい。なにもべつにおいらのなかまがほねををるといふでもないが、もつとも正ちきな人にはかたをもつてやりますのさ。まア、あそびねへ、いまにつるがかへるからなんぞしゆかうをしやせう」

べん天

「大こくさん、アノゑびすさんからきたたいがあるから

一口あげませう。さけはやうろうのたき水をとりにやりませう。十五どうじやく、どこへあそびにいつた、どうじたものだ」

大こく

「じゅうろくさん、（五穀）（御福）
「じゅうろくさん、ごこくもごふくもここんの大でき。さかなまでたんととれるし、それに又かねのなる木もだいぶそだちました。おたがひによろこばしい事でございませう」

「いへく、おかまいなさるな、おべんさん。もうかれこれひるねにもなるだらうから、さけよりはおまんまを御ちそうになりませう△

△しかし、ふろふきはもうくひあきました⁽⁵⁾」

十一丁ウ・十二丁オ

四かいなみしづかにて七ふく神ンのおんせわつゝうら
くまでもとゞき、かねのなる木をうへけるが、大こく
のくそをわざりにしてこやしにもせず、やきみ⁽⁶⁾その^(焼味噌)には
ひをよけもせぬに、たちまち大きくなり、おびた、しく
かねがなつてゆずやみかんのやうにし^(霜)もが^(霜)か、つてよく
いろがつき、まつき^(真つ黄)になつてゐるのは、かぜがふくと
このは^(木の葉)のちるやうにはたくとえだからこぼれてお
ちるを、くまでゝはきよせる此うへもないめでたきよ
中なり。

(子供)

「おいらがほんの小ばんをせ^(背)なにしよふゑもんだ」

(子供)

「うちへ七たび、くまでゝ^(三度)さんどはきよせたが、まだ
くこんなことぢやア、めつたにはひろひきれねへ」

(子供)

「こどもしう、かねはきます。こせんちやう^(古戦場)かねかけま
つ、といふぢぐちだ⁽⁷⁾^(地口)」

(子供)

「まだくかねはき^(三番 豊)さんば^(三)そうのほうがい、」

十二丁ウ・十三丁オ

いつもたくわん^(沢庵)じぶんになると、しほ^(塩)のねをあげるしほ
からいよの中がとんだものになつて、たくわん^(漬ける)をつける
じせつにはしものふつたどころでなく、ゆきのふつたや
うにしほがふつてか^(買)ふの^(買)なんのといふ事がなくてん
ぐにはきあつめつける。

(女)

「此しほがふううとつて、けさ大きにしほばらがいたか
つた。しほふりさぜんまめだ」

(男)

「けさはひどいしほのふりやうだ。さぞしほどけがして
みちがぬかるであらふ。みんなころばぬやうにしなさ
い。しほどけのころにはゆだんかならぬ」

(女)

「ヲヤ／＼このしほばしら⁽⁸⁾のたつた事は、此しほのぎよ^(魚)てん^(田)がきいてあきれるよ」

○又はまべではさかなをせびらきにしてすなば^(砂場)へおけば、しほがふるゆゑにひとり^(塩)でにいゝしほあんばい^(梅)になつて手もぬらさず^(干物)ひものができる。なんにつけかにつけ
ありかたいことなり。

○さてもいろ／＼ない、事ばかりできて、くれになると
もちの木にもちがなり、だん／＼^(実)みがいると木のまた
がさけるやうになる。ちんもち^(質餅)なんにもいらす、
かないぢうよつて^(蒸す)ふかすのつく^(搗く)のといふやうなおつく
うなこともなく、木へのぼつて「へんとこな」とつくき
になつてもいで^(挽いで)とり次へ

十三丁ウ・十四丁オ

つゞき「よいとこな」とこねどりをするきになつてな
げれば「どつこいきた」と木ばちへうけてもつてゆく。

なんのぞうきもない事なり。かねももちも木になるとは
かねもちになるといふ事なるべし。

(男)

「さア／＼みんなちつとやすむがいゝ。ことしからは●
●もちつきのせわがないからおほきにいゝ。
うそを▲

▲つくなんそはなほ／＼のことだ。そのかはり今あそこ
ですべつてしりもちをついて、こしから下かあんころに
なつた」

(男)

「つき入レもよくいろ^(色)かついた。此もちたちまち大ほ^(木)
となりはどうだ／＼」

(男)

この木はせうがよいそうでもちのあしがつよい。これが
すむとあわのほうへかゝるからたばこにしやう」

(女)

「のしもちがもう十九まい^(出来)てきましたね。十九のしも
ち、廿日よひやみつき」

(女)

「おそないときの神だのみといふから、^(初手)しよてなりをば^(年神様)としかみさまのおすはりにしやう。よくみ^(寒)かいつてねれたもちた」

十四丁ウ・十五丁オ

金のなるつるもちのなる木、あるとあらゆるうまい事だらけにてめでたく大みそかになりければ、いへく^(書出し)のはらひかそらからかきたしへそへてばらく^(掛取り)ふりくるゆへに、かけとり^(歩かず)にあるかすうち^(切手)にゐて帳めんをけすばかり。やしきかたのおはらひはきつてをそへてふり、町のはらひはかきだしがついてふるゆへ、きつさとうけとり^(判)のはんをする。

(男)

「おはらひかふるといふはおかげまいりこのかたた」
そろばんのおと

ばちくくくくくくく

(男)

「かうかねかふるとは、かねふつて地かたまるた。かねのふるよは一トしほふりし。⁽¹¹⁾かねふり吉事とは此ことたらう。」

○さても万左エ門の心がけよきゆへにふく神たち世の中をなほくよくなされし事ゆるゑ、せかいぢうみな大がねもちになり、これもみな万左エ門のおかげなりとて二代三代あとの△

△かりをてうめんよりくりだして利分をつけてかへしけるまゝ、ますく大がねふへけるゆへいろく^(塵)とことわれどもなかく^(茶)き、入れなく、とうくかねがちりあくたのやうにふへておきどころにこまりける。

(男)

「かけはふるくみそかはござる。あひのつち山あめがふるよう⁽¹²⁾にかけがふるはく。ふるは千ねんかめは万両の御しゆならはどうだ」

(男)

「ぜにかねふつてたかにとられるはちとふるいかね」

(男)

「二朱金はおいがきれてばらつく。四文せんはさし^(銭)がきれる。つくせんはく⁽¹²⁾だけのからふるのもあまり思ひつきでもねへと、こごとをいふもすさまじい」

十五丁ウ

さて大みそかは万左エ門かたにてみなく大めでたさにさけをふるまひ大さわぎで

■ゐるところへ、さもすさまじきかね玉ひかりを^(発して)はつして万左エ門かたへとびくるゆへ、「此金玉がうちへはいつてはどうもしやうがない、はやくふせぐがよい」とうへをしたへと大さわぎするを万左エ門き、つけ「それをいれぬやうには、はやくくらの戸をしめ^(窓)まどをたてろ」と

▲大こんぎつをしたりける。

(男)

「あれみや、かね玉だく。かね玉くれば人のきやくだ。ふせげく」

●六吉松もみなこいく。あの玉、かね玉、たと玉が

くるぞ。ゆだんをするなく」

十六丁オ

めしたきの久助「金にはやきみそが^(禁物)きんもつだ」といひだしたところが、みんなこれはよからうと、火ばちへみそをしこたま入れて大^(固)うちは^(扇)あほぎたて、かね玉をふせぎけり。されどもかねによくくはれたる家と見へ、やきみそのにほひもいつかうへいきにて、かね玉はだんく内へちかくなり、そのうへやきみその中よりもわきいづるゆへ、どうもかうもしかたなくみなくあき^(棒)れて、てんでにばうやばうきをもつてうちへはいらぬやうにふせげども、金玉のゐせいつよくなかく手にあまり、こまりはてたるばかりなり。

十七丁オ

金のゐせいにてちからづくもやきみそもいつかうにきかぬゆゑに、此うへはしようもなし。わらふかどにはふきたるといふ事ゆへに、万左エ門は^(家内)かないへわらふこと

をと^(止)め、わらふたものから三^(貫)ぐわんづ、くわりやうを
とると、きびしいひつければ、いづれもにがむしをく
ひつぶしたやうなかほをしてゑん^(縁側)がはへで、ふせぎける

つぎへ

(金玉)

「へひりの神は正ちきなかみで、たがひつた、かがひつ
た、ひつたほうへつんむけく」

(金玉)

「こゝまでござれ、あまざけしんじよ。わらへく。わ
らつてやれよ。わらいのゑん^(閻魔)まを見たやうなかほをして
ゐても、今に上野のわらひぼとけにして、はらをかゝへ
られぬほど福をよんでやるぞ」

十七丁ウ・十八丁オ

つぎはしのころんだにもおかしがるめしたきのなべ
助、下女のお百、おとくにいたるまで、かない百人ぐら
しのこらず^(無)ぶにん^(人相)そうをしてがまんをしてわらはずにゐ

る所へ、かね玉どもなんでもむりにはいらんとてきたと
ころが、みんなむづかしいかほをしてわらわずにゐるゆ
へに、これではいつてはおもしろくなし。わらはせてお
いてゆだんを見すましはいらんと、かね玉どもいろく
にふぎけてわらはせんとさまぐばかおどりをする。

○万左エ門かたにてはかね玉ふせぎにみなくしんぼう
してわらはずにゐたところ、かね玉どもいろくなば
かげた事してわらはせるゆゑ、ばんとうの忠助ついふき
だすとあとにこらへしわかいもの、でつち^(丁稚)、めしたきに
いたるまで家内百^(余)よにんいちどにとつとわらふこゑ百千
のいかづち

❖いちどにおちるごとくなり。「そりやこそしめた」と
かね玉ども「このきよ^(掬)よにのつてくらへはいれ」といふほ
どこそあれ、てんぐ千両二千両あるひは五千七千とお
もひくひにつかつぎ、ゑいぐごゑにてくらのとびら
おしひらき、われさきにおしこみしはめざましかりけ
るしだいなり。

「おもしれへく。それおせく」

「まいとしまいねん、とびこめ、はねこめ。だんなのおくらへさつきとやらかせ。それくほうく、きたくく」

「あしをふむなく。ヤレおすな。くるしいく」

「よいはいく。こりやくくく。おすなく」

「よいとくくよいさつき。よんやさのこれはいさ。うんとこさのさ」

「こりやく。きたく。まだく」

十八丁ウ・十九丁オ

さて万左エ門はふくの入りきたるをふせげども、なかくもつてふせがれず、よくくおもへば「かくのごとくにふく神のひいきにあひながらかねをいやがるとはちとぜいたくすぎる。これも七ふく神たちそのほかのかみくもわれをおまもりなさるのゆゑ。わるい事はすこしもなく、ことにわれひとりさいはひをうるにもあらず。大千せかいことくほうねんときけばまことにもつてありがたきことなり。此うへはなほさらきんぐをたい

せつになさん」としんく(信心)いよくいやましける。これによつてたからは日々にふえ、もはや百とま(戸前)へのくらにも入れどころなきま、ほかに大ぐら八とまへこしらへ、たからものをおさめ、ばんとう手代めしつかひにもそれくにはうびをやり、いよくますくかないのにぎはひなかくことばにのべがたし。

(男)

「こまるほどのたからもの。どこぞへねんぐに(納め)をさめたらよからう」

十九丁ウ・二十丁オ

さてもとくわか屋まんぎゑもんはまいねんまいとしあとへとしをとるやら、だんくにわくなり、女ぼうもとしく(数)にわかやぐうるはしき。ことにあまたの子をまふけ、すじうにんの子だから、まごひこやしはご、かずくなれば子だからあはせのしゆえんをそもよほしける。

(万左エ門)

「これからよめあはせやむこあはせをして、そのつきにはまごあはせ、ひこあはせをしませう。めでたいく」

(男)

「ひこあはせのつきにはやしやごあはせ、そのつきには(13)(細螺)きしやごはちきまでもいたしませう」

○男女の子どもこのほかにうよくするほどゐるゆゑに、うばや(抱き守り)たきもりまでがおめでたいといふこゑ。

「わやくくく。べちやくくくく。わんやくくく。べっちやくくくく」

大ぜいの子供

「おめでたうく」「おめでたうく」「おめでたうございますく」

(女)

「きんねんこんなくさぞうしはとんとなひ。むかしへかへつてこれも又はやるだらう。めでたいく」

二十丁ウ

さてもまれなるほうねんのよのなかとなり、きんぐ山

のごとくできて、われもくきたいそうなくらしになり、おほくの①

①くらをたてつらね、ぶんぶくちやがまににたまんぶく長じやのしん(身)せうとなつてにぎはふを、七ふく神見玉(繪)ひてよろこびたまふことかぎりなし△

△かゝるためしなき御代こそありがたけれ。めでたしくくくくくくくくくくく。

(福神)

「めでたしくくくくくく」

一勇齋國芳画作

江戸本郷五町目 藤岡屋慶次郎板

註(番号は本誌第四十八号からの通し番号にした。)

(5) 大黒天を祭る甲子祭において二股の大根を供えることから
の連想。

(6) 焼き味噌を焼くと金が逃げるといふ俗信。

(7) 地口は、同音あるいは似ている音で異なる意味を持つ言葉
の掛け合いによる言葉遊びのこと。

(8) 魚田は魚の田楽のこと。魚の「このしろ」の魚田の地口。

(9) 請求書。

(10) 金銭預かりの証文。

(11) 金売吉次の地口。金売吉次は伝説上の人物で鞍馬山から奥
州・藤原秀衡のもとへ牛若丸を連れ出した人物とされてい
る。

(12) 寛永通宝一文銭のこと。

(13) ニシキウズガイ科の巻き貝で、指で殻をはじき当てる遊び
に用いられる。

訂正

上冊六丁オに翻刻の誤りがありましたので訂正いたします。

誤「おらもあがつて……」↓ 正「ぼうもあがつて……」